遷移状態／融解する現在

佐原浩一郎

2011年10月、KOSUGI+ANDOによる《遷移状態 Transition State》は、コンテンポラリー・アート・スペースとして運営されている大阪、難波の「CAS」にて展示された。

静寂…

展示空間に入った時点で確認されるのは、鉄製のベビーベッド、回転するモビール、座面のない輪郭のみの椅子、スライドプロジェクタの置かれた回転する円形の台2組。以上が基本的な物質的構成要素のすべてである。作品空間はその中にラジオの気象情報らしき音声、あるいはスライドプロジェクタが投影する画像を織り交ぜながら推移する。円形の台の回転音とスライドプロジェクタの動作音は決して小さくなく、それらの抑制は意図して拒否されている。

ベビーベッドと椅子については、2011年5月に発表された《二番目の埋葬 Second Burial》から引き続き使用されている。ベビーベッドの中に「FUKUSHIMA 1971.3 - 2011.3.11」と表記のあるプレートが確認できるのも同様である。このベビーベッドによって、既にわたしたちは前作の展示時期である5ヶ月前とはほとんど重ね合わせることのできないようなコンテクスト、自らの肉体への働きかけを確実に変化させているコンテクストに置かれていることに気が付く。その間、意味作用の関係の総体は数回に分けて組閣し直されてきた。今や放射線について任意の地点におけるその有無、あるいはその有害性と無害性について問うこと、つまり放射線の有無を隔てる放射線量の或る数値、あるいは有害と無害を分つ放射線量の或る数値（或る数値を上回ると放射能汚染地域とされ、下回ると安全地域であるとされる）は、既にその役割を終えている。そうではなく、新たに取沙汰されるべき問題は、放射線量の実測値とその解釈項との臨時的に確定された関係性である。 数値とその解釈項との変動的な関係性を確認可能なものにするためには、そのような変動性を一旦凍結しなければならない。その結果、停止状態としての数値を確認することができるようになるだろう。計測時の数値としての放射線量は、それが関係性を含むものである以上、その有（害）無（害）を中和する界面として機能している。

共振する集合体

現在という時間性は、それが確認されることによって権力として浮上する。その確認は数値によって為され、数値こそが現在であると見做され、権力を行使するに至る。数値が確認されるには、それが停止状態であらねばならない。ここにおいて現在であると見做されているような数値は、事後的にのみ確認されうるものである。停止状態の事後的現在としての数値が、表象としてのいかさまの現在を構成し、そのような現在が諸身体を管理する。

或る基準値に従って現在の状況が有（害）と無（害）に配分されたとしても、そのことが個人を各々の身体の水準で直接的に統御することはなく、せいぜい行政がそれら配分量を何らかの判断材料として利用したという（真偽不明の）声明を渋々公表する程度である。反対に、変数として現在を浮上させている実測値は権力を伴

わせており、そのような数値の現在は、それを把握する諸身体に君臨し、諸身体は自らに管理の目を差し向けるのである。

ベビーベッドと椅子、そして回転するモビールは、常に変化するエネルギーを停止し顕在化するすべての数値（それらは数値によって顕在化される）と共振する共通の母体（共振器）であり、特定のコンテクスト下に置かれている人間はこれを既に内在させている。内在させていると言うならば、この作品空間全体に対しても同じことが言える。というのも、ベビーベッドと椅子、モビールという三つのオブジェクトが組み合わされたひとつの集合体は、何らかの主体を形成しているわけでは決してない。今述べたようにそれらは或る仕方で、数値と主体を結びつけている。それらは主体が自らの管理をその数値に求めるような関係性を取り持っている。同様に二組のスライドプロジェクタおよび回転する円形の台は先の集合体とは異なる仕方で、主体を或るものと結びつけている。或るもの、それは「非主体的な行為」と呼ばれるものであり、主体がそれと結びつけられることによって自らを危うくする彼のものである。

逃れゆくイメージ

プロジェクタは壁に写真を投影するのだが、或るタイミングを境にして円形の台が回転を始める。投影された画像は更新されながら右へ左へと水平移動を繰り返し、やがて一方のプロジェクタ（プロジェクタA）が、他方のプロジェクタ（プロジェクタB）を挟んで向こう側の壁に画像を投影する。光を遮る位置にあるプロジェクタBは、画像の中に影となって映し出される。プロジェクタBはプロジェクタAの側の壁に画像を投影する。その画像は田園風景の中で三脚に据えられたカメラが地面に向けられている様子を捉えたものである。 それは無人であることを強調することによって、機械に起因するものとしてのイメージに目を向けようとしているかのようであり、技術的無意識の介在と、社会的無意識の増殖を訴えかけるかのようである。そしてさらにその無人性あるいは非主体性は、例えば人間がカメラを構え、その指によってシャッターが切られたのだとしても、撮る人間における非主体的な行為として現れるであろう。それは撮るという条件において人間というものが要請されるような蓋然性を構成している非主体性、撮る主体の背後で作用するものとしての非主体性である。

壁に投影されるイメージは数秒ごとに更新され、時折投影画像の中にベビーベッドの影を浮かび上がらせる。イメージは途中から水平移動を開始し、移動するそのイメージを眼で正確に認識することは困難となる。更新され、消滅することで逃れ去っていくことをその旨とするはずのイメージが、ここにおいては端から逃れゆく状態として現れてくるのである。

いずれにしても壁に投影されるイメージは情報を提供しているわけではない。 しかしまたそれは情報ではないということを主張するものでもない。そこから何かしらの情報を読み取ることは可能であるだろうし、それは何一つ不自然なことではない。それでも事実、当のイメージは情報ではなく、情報と非情報の間、つまり一種の亀裂であり断面であり、「それらしい情報」を投影するスクリーンである。数々のイメージは福島県内のものであろうか。写真の中に「福島」の文字を確認するこ

とは可能だが、その文字すら「それらしい情報」に止まり、やはり情報として機能することを拒んでいるのである。情報でも非情報でもないもの、それには過激さや攻撃性や単一の正当性、そして無関心などに席を譲ることのない両者の間のエネルギーの様態、すなわち「遷移状態」という概念がふさわしい。

この空間は身体の外部性として身体の侵入を許すと同時に、身体の内部性として身体の中に見出されるだろう。この空間の外に身体が存在し、その外に再びこの空間が登場し、それは無限に続いてゆく。それは内へのベクトルにおいても同様である。

不可視のベイビー

イノセント・ベイビーは非物質的なものであると同時に不可視のものである。 そこから必然的な帰結として、ベビーベッドの中に赤ん坊はいない。彼らを覚知するには、存在しないものに対して共振、共鳴し、恐れおののかねばならない。実際のところ、イノセント・ベイビーとは原子力発電所を意味する語ではない。この語が意味しているのは人間を恐れおののかせ、叫ばせ、苦悶させる、決して抹殺することのできない不可視の潜勢力である。抹殺することができないと言っても、それはすべての原子力発電所を廃炉にすることができないということではなく、それが達成されたとしても不可視の潜勢力は或る場に対する中心を解体する、すなわち原子力発電所という場を見限るのみであり、再び中心を供給すべく異なる場の到来を待機するともなく潜勢するのである。

スライドプロジェクタは最後の写真を投影し終えると、自動的に再び初期状態へと戻される。そのとき、スライドプロジェクタと円形の台は、いずれも小気味よい物音を立てながら、ほとんど注視を促すように取り澄ましつつ、スムーズに無駄なく動作する。自動的に初期状態へと戻され再び始まるのは、単に展示の上での利便性に起因するだけではない。一見形式的に思われるこのプログラム（繰り返し）は、事故直後の時点へ引き返すという事態を仮定する。その場合わたしたちはどのようにやり直すことができるだろうか、結局同じことを繰り返すだけなのではないだろうか。 一見そのような挑発的な問いが投げ掛けられているように感じられるかもしれないが、実際にはそれは現在をより感覚できるようにするための仕掛けである。ここにおいて「現在」とは、時代傾向の表象としての停止状態の事後的現在ではなく、過去からの変化を認める直前の痕跡としての現在でもなく、常に新たに到来し続ける事故直後としての「現在」に他ならない。

喧噪…

難波は喧しい街だ。 喧しさは人を行動させる。わたしたちは或る意味で、自らを喧しさの中へと導いてゆく欲望を持っている。実際、多くの人々は喧しさの中で安穏とするよう急き立てられている。そのために喧しさが当てにされ、喧しさは諸主体を所属させてゆくだろう。けたたましく不規則な動作音を立てながらぎくしゃくと動くスライドプロジェクタの記憶が、難波の街を行く人々の風景を緩慢に微睡ませ、間もなく制圧しようとしていた。混ざり合う二つの喧噪の境域は、もうほとんど見分けがつかなくなっている。